

# カワウ繁殖コロニーの拡散と新規コロニーにおける対策

とりまとめ：加地弘一

山梨県では、山梨県カワウ管理指針に基づき、カワウのねぐらコロニーを甲府市下曽根地先1か所（以下、下曽根コロニー）に封じ込めた上で、下曽根コロニーで繁殖抑制を行い個体群管理している。また、関係機関の連携により、ねぐらやコロニーが拡散しないよう監視を行うとともに、下曽根コロニー以外に拡散した場合は早期に対策を行い下曽根コロニーに戻す対策を行っている。2019年9月に山梨県畜産酪農技術センター敷地内でカワウが繁殖しているとの情報があり、調査を行ったところ、多数のカワウの営巣と巣立ち直前の雛を確認した。その後の対策でカワウはいなくなったものの、対策を行ったのがカワウ繁殖期の終盤であったため、2019年は畜産酪農技術センターで複数の雛が巣立ったと考えられた。2020年は下曽根コロニーで繁殖が全く行われず、繁殖は畜産酪農技術センターのみで行われたので、その状況と対策概要について報告する。

## 結果の概要

下曽根コロニーから約1.4km南西に位置する畜産酪農技術センター場内で、2020年3月9日に15羽のカワウの飛来を確認し、3月19日には3巣の営巣を確認した（図1）。その後、個体数と営巣数は増加し、個体数は5月中旬に約100羽、営巣数は5月13日に最大52巣を確認した（図2）。その後、個体数と営巣数は減少し、6月下旬にはほぼ繁殖が終了したと考えられた。



図1 調査位置図

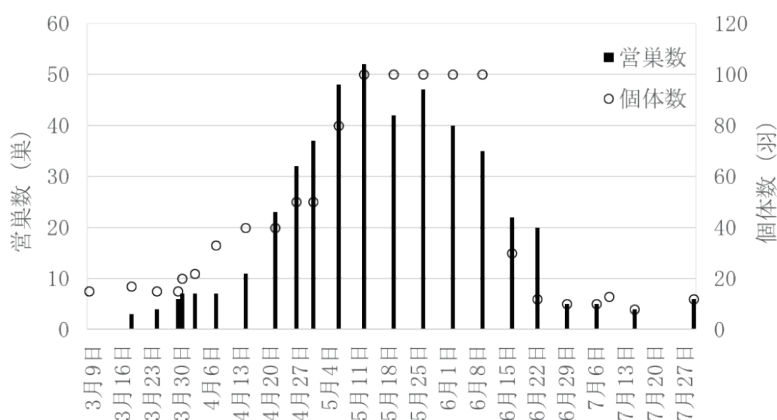


図2 畜産酪農技術センター内のカワウ営巣数と個体数

確認初期には、樹木にビニール紐を巻き付けたり営巣初期の巣を撤去して畜産酪農技術センターから下曽根コロニーにカワウを戻すことを試みたが、場内の別の樹木に移動し下曽根コロニーには戻らなかった。2019年に繁殖に成功していたため畜産酪農技術センターへの執着が強いと考えられ、他所への拡散リスクが低いと判断し2020年は畜産酪農技術センター内で繁殖抑制を行った。畜産酪農技術センターは営巣木が高く、擬卵置き換えやドライアイス処理ができなかったため、巣の撤去によりふ化の阻止を行った。巣の撤去には長い棒の先端に鉄製のかぎ爪を装着した自作器具を用い、営巣木に登って下から巣を突き落とす方法で行った。巣の撤去は4月3日から6月17日まで約1週間おきに13回行い、合計136巣、207卵を撤去した（図3）。なお、器具が届かず撤去出来なかった6巣から12羽の雛が孵化し、うち11羽が巣立った（図3）。巣の撤去には1回あたり15分から240分、合計1,746分を要し、1巣当たりの処理効率は5.3～33.0分/巣（平均14.4分/巣）であった（図4）。これは、

下曽根コロニーでの擬卵置き換えの処理効率 28.9 分/巣と比較すると短いものの、ドライアイス処理の 5.9 分/巣や着色ドライアイス処理の 8.6 分/巣よりも長かったり。

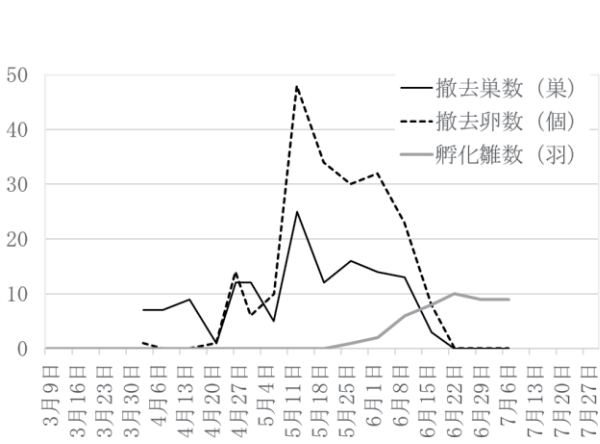


図3 畜産酪農技術センターでの巣と卵の撤去数と孵化雛数

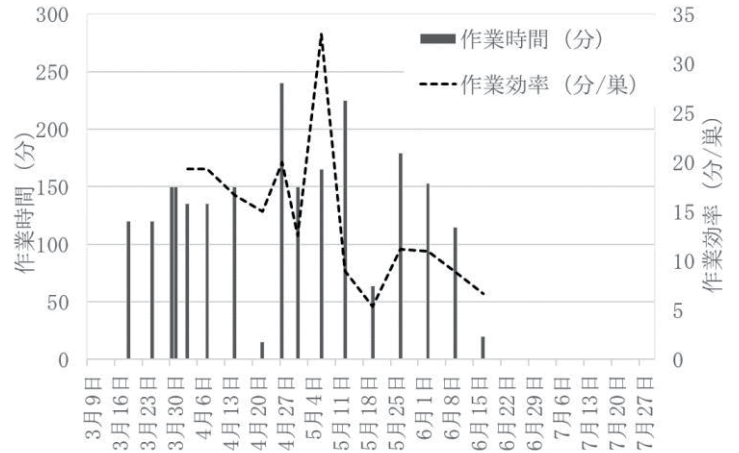


図4 作業時間と作業効率

繁殖後期には、敷地内の樹木でのカワウ個体数が減少し、代わりに敷地内にある東京電力の高圧線鉄塔でカワウが確認されるようになり、2020年6月9日には最高の169羽を確認した。その後、日没後にロケット花火とレーザーポインター照射による追い払いを継続したところ、高圧線鉄塔の個体数は減少し、最終的にはすべてが下曽根コロニーに戻ったと考えられた。なお、2020年の下曽根コロニーでの営巣は1巣のみで、その後この巣は放棄されたため下曽根コロニーでの孵化雛数はゼロであった。

巣の撤去は繁殖地を直接攪乱する手法であり、攪乱により繁殖地を放棄して他所へ拡散する事例が見られることから、山梨県では巣を撤去せず擬卵置き換えやドライアイス処理によるふ化阻止技術を開発し繁殖抑制を行ってきた。今回は、繁殖場所の位置が高くこれらの技術が使えなかったため、やむを得ず拡散のリスクがないことを確認の上巣の撤去を行ったが、この対策は例外的であり、今後も山梨県カワウ管理指針に基づき下曽根コロニーでの繁殖抑制による個体群管理を行っていく事を基本とすべきである。

文献

1) 加地弘一・青柳敏裕 (2021) : 着色ドライアイスによるカワウ繁殖抑制作業の効率化. 山梨県水産技術センター事業報告書, 48, 39-45.